

第二問

(四)

法師を近親に持つ女房なら、命あるものはいつか死に、別れも必ず訪れると知っているはずで、息子に先立たれたからといって、今さら驚き悲しむはずがない、ということ。

敵融坊と家族関係にあるのだから、生きている者は必ず死ぬ時が訪れ、母子の別れは世の中にあるのだということに、今さら嘆いて悲しむべきでないということ。

(五)

怒ることは罪であることを知っているのに実践できていないことを指摘されたため。7点

女房が生きている者は必ず死ぬという理を知りながら、息子の死を嘆いているのを責めると、その女房に、敵融坊も腹を立てることが理に反していると知りながら、それを止めようとしないうちに点を指摘され何も言えなくなったから。